

「移入動物ヌートリアの 分布拡大と被害問題」

三 浦 貴 弘

I. はじめに

本来、日本に生息しなかったはずの動物が住み着き、繁殖をするようになった場合、これを帰化動物、または移入動物という。

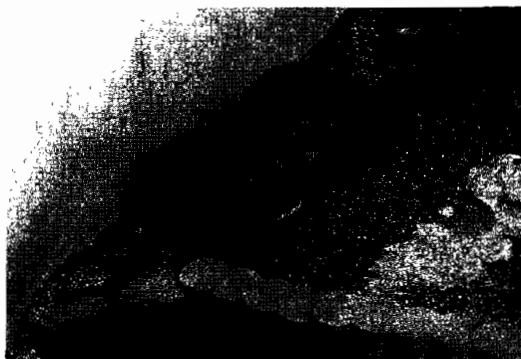
近年、我が国で野生化した哺乳類として、タイワンザル、チョウセンイタチ、アライグマ、タイワンリス、マングース、ヌートリア（写真1）などがその代表にあげられる。これら動物は人間側の都合で持ち込まれ、分布拡大をみせるようになった。

筆者は今回、東海地方のヌートリアに注目した。今日、我が国でのヌートリア研究は進んでおらず、特に東海地方ではヌートリアの侵入した経緯が明らかになっていなかった。

さらに、ヌートリアの大規模で連続した分布域が見られる岐阜県本巣郡巣南町（図1参照）に着目し、現地での被害問題の現状と対策、有害鳥獣駆除の状況を考察した。生態面においては捕獲個体に発信機を装着することができ、動きを追跡した。

また、我が国では研究事例のない巣穴の掘削調査も実施できた。これらを踏まえ、現在のヌートリア問題について検討してみたい。

写真1 ヌートリア



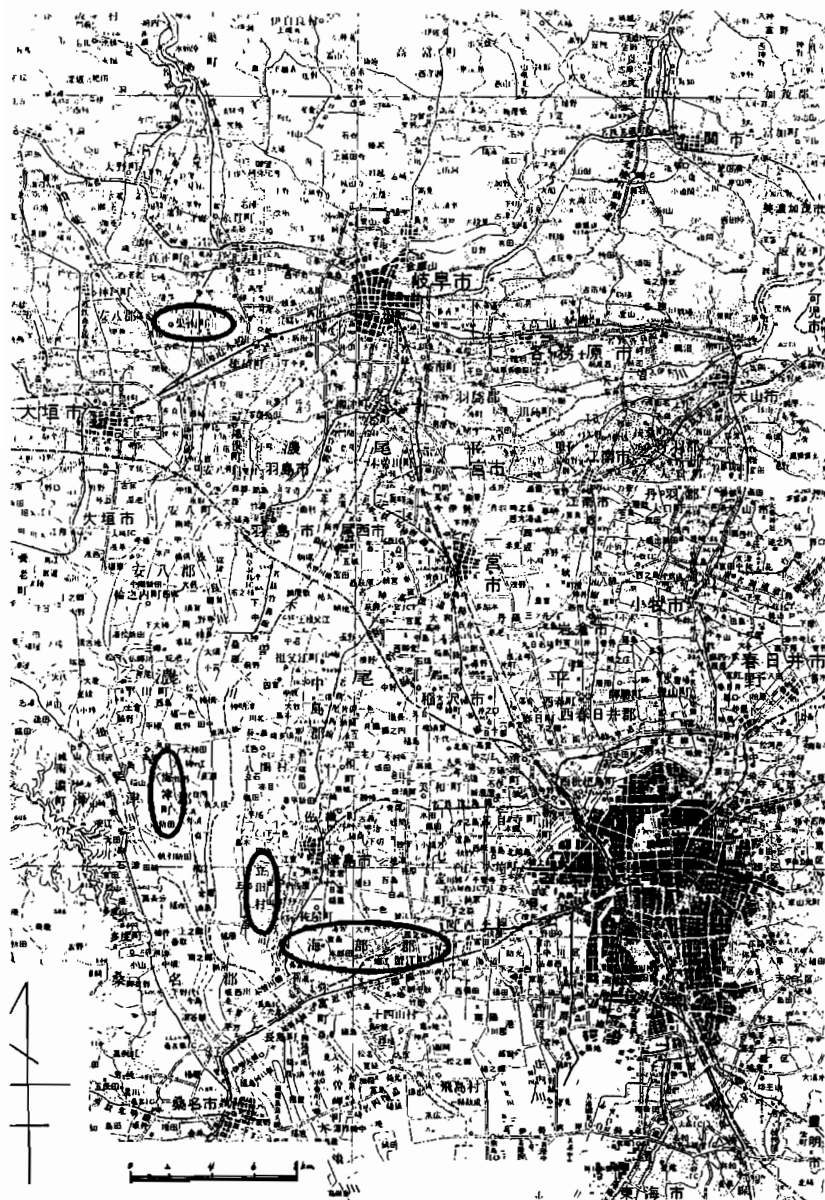


图1 调查地周边概念图

Ⅱ. ヌートリアについて

ヌートリア (*Myocastor coypus*) は、南米アルゼンチンのラプラタ川流域が原産地である。ヌートリアの成獣は1.5キログラム以上の個体をさし、大きいもので頭胴長60センチ、尾長40センチ、体重は10キログラムにもなる。一般に茶褐色の毛に覆われており、円筒状の尾にはまばらに毛が生えている。鼻が大きく、目と耳は小さい。鼻の先には針のようなヒゲをもつ。オレンジ色の大きく鋭い2枚の門歯をもち、死ぬまで歯の成長は続く。前脚、後脚ともに5本の指があり、各指には鋭い爪がある。後脚には水掻きをもっていて、水中では活発な動きをみせる。主に夜行性で、明け方と夕方に活動的になる。年に2~3回は出産し、1回の出産で平均5頭を出産する。幼獣は1年を経たないうちに成獣となる。個体の寿命は10年ぐらいになるといわれる。食性はほぼ完全な草食であり、水辺の植物の葉、茎、根を食べる。

河川では流れの緩やかな場所を好み、巣穴もそのような場所に多く作られる。巣穴は水際に面した土の護岸に掘られ、入り口を1~3箇所備えている。増水時に水位が高くなる場所では増水時用の入り口も掘られる。

Ⅲ. ヌートリアの分布拡大

1. 戦前におけるヌートリアと人々の関わり

ヌートリアは1907年にドイツより展示目的で持ち込まれる。1939年には神戸の動物商が米国より150頭を輸入した。うち47頭が毛皮獣として軍部内で飼育、増産された。民間においても日本軍奨励による「軍用毛皮獣養殖所」が設置され、残りの103頭が分譲された。1944年には我が国での飼育個体数は東京以西で4万頭にもなった。

ヌートリアの飼育熱の高まりにより、1942年に飼育マニュアル本が複数出版された(図2)。マニュアル本からは、当時の飼育状況がうかがい知ることができるほか、全国各地に「ヌートリアファン」と呼ばれる人々が存

実験
ヌートリア
の
飼育指導書
河野仙吉 著



淡水獣
ヌートリア
の養殖
三島康七 著



図2 戦前にみられたヌートリア飼育に関する出版物

在した事、いくつかの飼育組織があったことが明らかになった。飼育希望者の殺到により個体供給が間に合わず、個体を高価な価格で売り込む悪質なブローカーも現れた。それほどにまでヌートリア飼育は当時の人々に魅力的なものと映ったのである。

2. 戦後におけるヌートリアと人々の関わり

戦中においては食肉獣とも毛皮獣ともなる家畜が必要とされた。ヌートリアは繁殖力が大で死亡率が小、おとなしく飼いやすいため絶好の軍需動物と言えた。毛皮は防寒着に、肉は食用に利用された。1945年の我が国の敗戦により、軍で飼育されていたヌートリアは放棄され、野生化した可能性がある。しかし、熱心なヌートリア飼育家は戦後も飼育していた事が1948年に畜産局生産課がまとめた「ヌートリア飼育者名簿」からわかる。そして、戦後にヨーロッパにおいて毛皮ブームが起こり、輸出目的で新たに飼育を始める人々が現れ出した。1952年にはヨーロッパ向けに毛皮500枚を輸出している。しかし、品質の劣るヌートリアの毛皮の需要はすぐに

無くなり、ヌートリアの放棄が起こる。ここに我が国における2度目の野生化がある。

東海地方のヌートリアのルーツは戦後の飼育によるものという証拠が筆者の調査によって明らかになった。それは、愛知県海部郡周辺（図1参照）で「愛知県ヌートリア農業協同組合」が戦後に組織されていた事を示す組合資料を入手できたためである。これには組合員の住所も記載されており、聞き取り調査を実施したところ、放棄があったとの回答を得る事もできた。当農協は、1952年に三重県四日市市で行われた博覧会においてヌートリアを展示していることから、興味を持った人々が購入し、各地に持ち込んだ可能性もある。

IV. ヌートリアの分布拡大

1. 愛知県の事例

愛知県での初めての有害鳥獣駆除個体は1984年に海部郡立田村（図1参照）で捕獲された。その後、10年近く、海部郡を中心とした木曾三川下流部においての捕獲が目立った。しかし、1994年以降、海部郡での捕獲数が減少を見せ、海部郡の北にある稲沢市、春日井市、小牧市あたりでの捕獲数が増加する。木曾三川下流部において河川改修や水路の整備が進み、ヌートリアの生息環境が悪化したため、生息場所を移動させたと推察される。

2. 岐阜県の事例

岐阜県におけるヌートリアの有害鳥獣駆除は1982年から始まっている。聞き取り調査によって、木曾三川下流部における海津町（図1参照）において1980年ごろより目撃されていた事がわかった。また、大垣市農務課の話によると1980年以前は大垣市では見られなかったという。1982年に岐阜市北部で見られている事から、急速に分布を下流部から上流部へと移したと推察される。愛知県の場合と同様に、生息地の環境変化があった事や、個

体数の増加が招いたものと考えられる。

V. 岐阜県本巣郡巣南町におけるヌートリア問題

1. 巣南町における被害の現状

巣南町は岐阜県の南西部にあり、岐阜市は東へ10キロの位置にある。2000年度は130頭ほどのヌートリアを有害鳥獣駆除で捕獲した。生息に適した自然環境があり、捕獲頭数は一向に減少しない。被害問題としては生息地周辺の田畑における食害があげられる。稲や家庭菜園でのトマト、ナス、豆などが食害に遭っている。被害対策としては田畑の周囲に簡単なトタン板やネットによるフェンスがみられた。食害はあるものの、対策をしていない農家も認められた。今のところまとまった被害にはなっていないため、住民の被害意識は大きくないといえる。

2001年度は48頭が有害鳥獣駆除された。当年度より駆除要請があった場合のみ捕獲する方針に変更されたため、捕獲数の減少が起こった。駆除要請の理由としては、農作物に被害があったわけではなく、住居の敷地内や田畑に住み着いていることによる住民側の嫌悪感から駆除要請を出した場合が多く認められた。巣南町の場合、河川周辺に十分な植物があり、本格的に農作物に被害を出すに至っていないと推察される。

2. テレメトリー調査

巣南町産業課と巣南町猟有会の協力を得て、テレメトリー調査を実施した(図3)。テレメトリー調査によって、ヌートリアの行動を知る事ができる。2001年7月27日に雄(4キロ・頭胴長50センチ・尾長30センチ)を捕獲し、発信機を装着した(図3①)。8月2日の23時30分までは放獣地点から長護寺川に入り、主に夜間に行動をしている事がわかった(図3②～⑤)。しかし、翌3日の3時40分の調査では1300メートル下流まで移動をした(図3⑥)。当日は雨天であり、河川の増水がみられた。聞き取り調査によっても増水

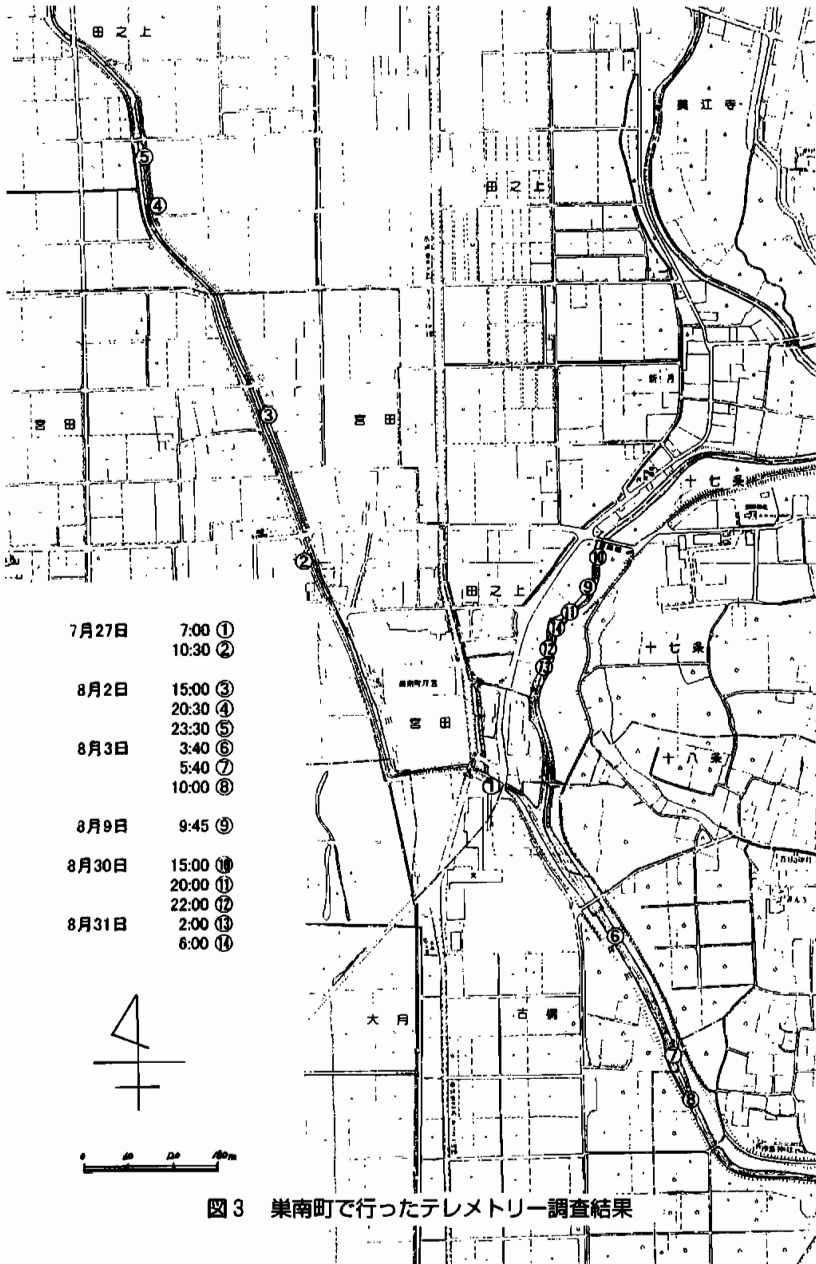


図3 楽南町で行ったテレメトリー調査結果

時に大きく移動することや田畑に入り込む事がわかっている。巣穴が水没するためにそのような行動をみせると推察される。8月9日には犀川を上流へと進み、ヌートリアの巣穴が多くみられる地点で確認できた(図3⑨)。8月31日までは栗南橋下流で主に活動していた(図3⑨~⑭)。9月中旬の調査で、個体の死亡が確認されたため、テレメトリー調査は終了した。

3. 巣穴掘削調査

我が国においてヌートリアの巣穴を掘削して内部を調査した研究事例はなく、巣穴の構造によっては護岸の決壊等の危険性があると指摘されているため、実態を知る事の意義は大きいと考える。巣穴は有害鳥獣駆除されたあとのものを掘削した。2箇所の巣穴の掘削を行い、1つは巣穴の総延長が6.5メートルにもなった。この巣穴では巣材の持ち込みが確認できたため、繁殖にも用いられていたと考えられる。また、両方の巣穴とともに、出入り口は2カ所あることが確認できた。多くの巣穴の観察によって、巣穴には普段の生活のベースに用るものと、移動先での休憩用に用いる2種類があることがわかった。巣穴による護岸崩壊等の保安上の問題としては、巣穴位置の地質状態に影響される。砂質の場所に連続的に巣穴を掘られると増水時に護岸が崩れる恐れがある。

VI. まとめ

筆者は戦前から戦後までのヌートリアと人々の関わりを含め、総合的なヌートリア調査をしてきた。かつて、ヌートリアほど人間に翻弄された哺乳類は他に例が無いだろう。国内において絶滅に瀕する動物があるなか、ヌートリアを始めとする移入動物は環境に適応し、生息域を拡大しつつある。ヌートリアは我が国では競合する種もないため、着実に分布を拡大している。

移入種問題が活発となり、生態系に大きな影響を与える種に関しては撲

滅させる動きが出ている。我が国のヌートリアも同様に撲滅させる事がふさわしいだろう。実際、ヌートリアによる農作物被害が甚大な地域もある。また、今後ヌートリアによって影響を受ける動植物が出てくる可能性もある。巣穴による保安上の問題もある。しかし、我が国のヌートリアを簡単に撲滅させることはできるのだろうか。撲滅させるには現在の生息分布を明確にした上で、大規模な駆除や営巣させないような環境を作るなど莫大な時間とコストがかかる。ヌートリアは我々日本人の都合で持ち込まれた。故に、責任をもって管理し続けていく事が必要ではなからうか。

参考文献

- 三浦慎悟 (1977) テレメトリー法によるヌートリアのホームレンジの推定. 「動物テレメトリーの現況」、pp.22-26
- 三浦慎悟 (1994) ヌートリア. 「日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (I) V. 水生哺乳類」、pp.539-546
- 三浦貞弘 (2000) 愛知県におけるヌートリアの帰化と愛知県ヌートリア農業協同組合. ワイルドライフフォーラム、6 (2)、pp.55-60
- 三島康七 (1942) 『淡水獣ヌートリヤの養殖』. 育生社弘道閣、98p
- 河野仙吉 (1942) 『実験ヌートリヤの飼育指導書』. 高田書院、82p
- 高島春雄 (1955) 『動物渡来物語』. 学風書院、p269
- 四日市市 (1996) 『四日市市史』. 四日市市、966p